

[成果情報名]長崎県内におけるイチゴ炭疽病菌の種構成および薬剤感受性

[要約]県内のイチゴ炭疽病発病株から分離された 46 菌株のうち、優占種は *C. fructicola* である。*C. fructicola* の薬剤感受性は、ベノミル、アゾキシストロビン耐性でジエトフェンカルブ感受性菌株が 97% を占め、基幹防除薬剤の一つゲッター水和剤で防除できる。

[キーワード]イチゴ、炭疽病、種構成、薬剤感受性、ベノミル、アゾキシストロビン、ジエトフェンカルブ

[担当]長崎県農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先] (代表) 0957-26-3330

[区分]野菜

[分類]指導

[作成年度]2016 年度

[背景・ねらい]

イチゴ炭疽病菌は *Colletotrichum gloeosporioides*(=*Glomerella cingulata*) は種複合体であり、主な 3 種である *C. aenigma*、*C. fructicola*、*C. siamense* についてはプライマーがあり PCR で判別可能である。昨年は長崎県内のイチゴ炭疽病潜在感染株の種構成について明らかにした (2015 年度成果情報、図 2)。本年は、圃場で発病した株由来の菌株について種構成を調査するとともに、薬剤感受性について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 発病株から分離した 46 菌株のうち、33 菌株 (72%) が *C. fructicola* であり優占種である。その他は、*C. aenigma* 6 菌株 (13%)、不明 7 菌株 (15%) である (図 1)。
2. *C. fructicola* 33 菌株のうち 32 菌株 (97%) がベノミル、アゾキシストロビンともに耐性を示す。耐性を示した菌株についてはすべてジエトフェンカルブ感受性である。残り 1 菌株は逆の感受性を示す (表 2)。
3. *C. aenigma* はすべてベノミル、アゾキシストロビン感受性でジエトフェンカルブ耐性である (表 2)。
4. いずれの種、菌株も、本県のイチゴ炭疽病基幹防除薬剤の一つであるゲッター水和剤 (ジエトフェンカルブ・チオファネートメチル混合剤) が有効である。

[成果の活用面・留意点]

1. 薬剤感受性検定は、寒天希釈平板法により 1 濃度 (100ppm) の結果である。
2. 発病株 1 株あたり 1 ~ 3 菌株単孢子分離して試験に供試した。
3. 地域の傾向を把握するためには、調査圃場数を増やす必要がある。
4. ベノミルとチオファネートメチルは同一作用機作の殺菌剤である。

[具体的データ]

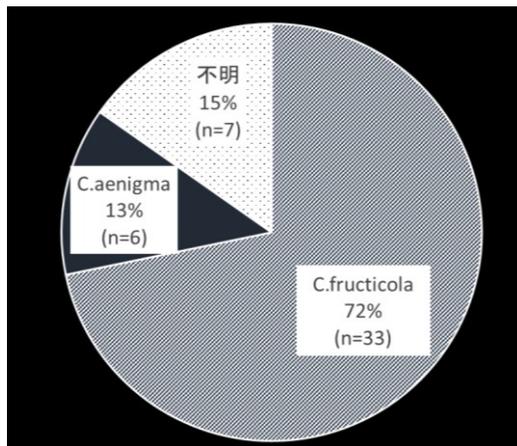


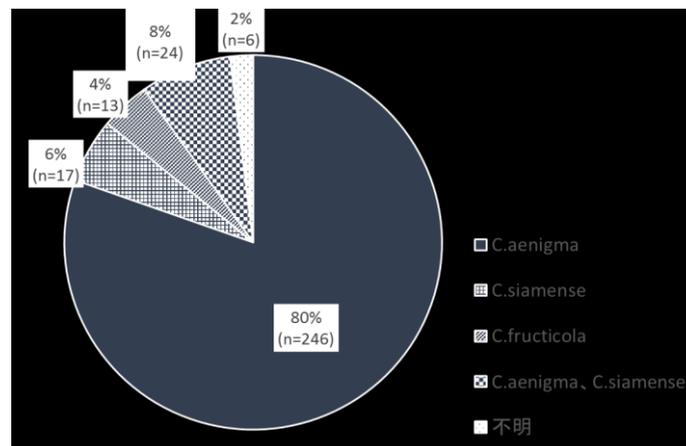
表1 供試菌株の由来

採集年度	採集地	分離菌株数
2016	西海市	2
	東彼杵	2
	雲仙市	12
	南島原市	11
	平戸市	6
	壱岐市	6
	2014	島原地区
2013	島原地区	2

図1 県内発病株由来のイチゴ炭疽病菌の種構成割合

表2 種別の薬剤感受性検定結果

	ベノミル、アゾキシストロビン耐性、 ジエトフェンカルブ感受性		ベノミル、アゾキシストロビン感受性、 ジエトフェンカルブ耐性	
	<i>C.fructicola</i>	菌株数	32	1
(n=33)	割合 (%)	97.0	3.0	3.0
<i>C.aenigma</i>	菌株数	0	6	6
(n=6)	割合 (%)	0	100	100



<参考データ> 図2 潜在感染菌株（病原性有）由来のイチゴ炭疽病菌の種構成（2015年度成果情報）

[その他]

研究課題名：炭疽病のエフェクター分泌阻害による感染制御剤の開発

予算区分：国庫（SIP事業）

研究期間：2014～2018年度

研究担当者：江頭桃子、寺本健、中村吉秀、森三紗（島原振興局）